

# 行雲流水

No.368 令和6年2月13日発行

## ヤクーバとライオン その2

校長 寒河江 正人

生徒諸君。

「校長だよりNo.362」で紹介した「ヤクーバとライオン」の続編を紹介しよう。

前作で登場した少年ヤクーバは、**傷付いて疲れ果てたライオンを殺しはしなかった。**  
ヤクーバは、自分の表面を飾るだけの名誉は捨てて、「真の勇氣」を心に刻んだのである。

**救われたライオンの王者、その名はキブウェ。**

その後、ライオンの一族は、村の牛を襲いに来ることはなくなった。

ヤクーバとキブウェは、ともに「**相手を深く深く尊敬し合う心**」で結ばれていたのだ。

だが、その後、**かつてない大飢饉**が、村を、ライオン一族を襲った。

人間も、けものたちも、次々に飢えて死んでいった。

木も草も動物も食べつくされ、あたり一面、砂漠のようになってしまった。

キブウェもまた、その体は、がりがりにやせてしまった。

村には、まだわずかの牛が生き残っていた。

ライオンの王者キブウェは、一族のために獲物を手に入れなければならない。

「**群れのリーダー**」として、大きな**責任**を負っていたのだ。

キブウェは、牛たちのいる囲いの前にじりじりと向かった。

そこに、牛の世話をする「**あの男の姿**」を見つけた。

それは、かつて**自分の命を救ったヤクーバ**だ。

**さあ、生徒諸君。**

**キブウェは、仲間のライオンたちが見つめるなかで、この後、どうしたと思う？**

**ヤクーバは、命をかけても牛たちを守らなければならない。どうしたと思う？**

人間世界における「**戦争**」にしても、「**民族紛争**」にしても、双方に言い分があるのだろう。

しかし、それでは「**際限のない暴力と殺し合いの連鎖**」になってしまうだけだ。

**その惨劇と悲劇の繰り返しを断つ。**それは、まさに現代に生きる人間の課題であろう。